

資料名 | ナワルの木彫  
 標本番号 | H0268518  
 地域 | メキシコ  
 サイズ | 縦 24 × 横 95 × 高さ 77  
※サイズの単位はセンチメートルです

想像界の生物相  
**ナワル**  
 民博 人類文明誌研究部 すずき もとい  
 鈴木 紀



みんなくのアメ리카展示場の「創る」セッションには、アレブリへと総称されるメキシコ南部オアハカ州の動物木彫が展示されている。鮮やかな色に塗られた動物たちのなかでも一際目を引くのはナワルである。全身真っ赤な四つ足の体だが、顔は人間だ。白黒の二本の角と黄色く長い耳をもち、耳と鼻のあたりからフサフサとした白い髭が生えている。作者のアンヘリコ・ヒメネス氏によれば、ナワルとはシャマン（スペイン語のクランデーロ）のことで、その呪力で病気を治すだけでなく、動物に変身することができるという。この作品は、その角と髭の特徴から明らかになようにヤギに変身したナワルを描いたものである。

◆◆ ナワルをめぐる信仰 ◆◆

ナワルは、メキシコから中米地方にかけて広がるメソアメリカ地域の先住民民族のあいだでよく知られた存在である。ところがその意味は、地方によって異なる。例えば、一九九二年にノーベル平和賞を受賞したグアテマラのキチエ民族の人権活動家リゴベルタ・メンチュー氏は、自伝のなかで、ナワール（ナワル）とは、誰もが生まれながらにもつ、人に寄り添う影のようなもので、たいてい動物の形をしていると述べている。

そしてキチエの子どもたちは、もし動物を殺せば、その動物をナワルとする人物から恨みをかうと教わることで、動物との共生という価値を学んでいくという。つまりナワルには、動物に変身するシャマンと、人間の分身動物という二つの意味があるといえる。どちらも先スペイン時代以来の信仰だが、学術的には、本来のナワルは前者で、後者はトナルという別の概念だとする説が有力である。ただし現代の先住民のなかには、両者を融合させて独自の概念を形成している場合もある。例えばメキシコのオトミ民族のあいだでは、人間の分身動物という考え方が広く受け入れられているだけでなく、人が病気になる一因は、その人の分身動物が邪術師（他者に災いをもたらす者）の分身動物から攻撃を受

けているからだといわれている。そんなとき、シャマンの治療が効果を上げるのは、シャマン自身の分身動物が、攻撃を仕掛けている分身動物を退治するからだ。

◆◆ 動物をとおりて人間社会を見る ◆◆

ところでナワルになるのはどんな動物だろうか。メソアメリカ全体の傾向を指摘することは困難だが、マヤ系の先住民民族に住むメキシコ、チアパス州のチャムラ集落では興味深い事例が知られている。政治的有力者や有能なシャマンの分身は、ジャガーやコヨーテなど肉食で夜行性の動物であるのに対し、一般の人は、ウサギやリスなど草食や雑食の動物を分身動物とする傾向があるという。さらに注目すべきなのは、邪術師が通常の分身動物に加えて、牛や羊、豚などの家畜の分身もつと考えられていることである。家畜はありふれているので、攻撃対象の人間に、それとは気づかれずに接近することができるからだ。ナワルをシャマンと解釈するにしても、分身動物と解釈するにしても、メソアメリカの先住民の人びとは、動物の特徴をよく観察し、その特徴を人間に投影することで、人間の側の社会関係をよりよく理解しようとしていることは確かである。



鹿（左）とナワル（右）のアレブリエ  
（メキシコ民芸美術館、2010年）